令和２年１月１日（水）東奥日報（30面）

「寿命」延伸へデータ連携

弘大 九大など４大学と

岩木健診軸 相互検証 健康施策に活用

弘前市岩木地区の健康ビッグデータを蓄積している弘前大学は、九州大、京都府立医科大、名桜大（沖縄県）、和歌山県立医科大の４大学と連携し、さらに大きなビッグデータを構築し、健康施策に役立てる「データ連携」を行っている。平均寿命が短い本県と、長寿が多い京都などの住民の健康状態を比較することで、より的確で効果的な健康寿命延伸策を立てられるのでは―と期待されている。

（菊谷賢）【本記１面】

全国から研究者が集まり、健康ビッグデータの有効活用策を話し合ったデータ連携会議＝２０１９年９月、弘前大

「眠りにつくまで、京丹後地区（京都）の人は平均３分、弘前の人は15分。社会活動参加時間など他にも多くの興味深いデータが浮かび上がってきた」。京都府立医科大の的場聖明教授（循環器・腎臓内科学）はこう力を込める。同大は弘大と２０１７年にデータ連携を開始。弘大と共通の調査項目を設け、丹後地区住民約千人を対象に今後15年間、健康調査を実施する。「１００歳以上の人が全国平均の２・７倍も生活する丹後地区と、平均寿命が短い青森県を比較し、世界に通用する健康施策を立案したい。長寿を他の地域にも広げたい」

データ連携は、５年ほど前に弘大と九州大が開始した。その後、研究者同士のつながりによって京都府立医大など３大学が加わった。

ほかにも東北大、広島大、大阪大、名城大、立命館大などとも協力関係を維持しており、関わりがある大学は計12国公私立大に上る。

データ連携の成果として、弘大ＣＯＩ拠点長の中路重之特任教授は「九州大が１９６１年から福岡県久山町で行っている調査で、筋力が認知症と関係することが分かっているが、岩木健診のデータから、その筋力に影響を与える生活習慣を明らかにすることができた」と語った。

19年９月には、各地区の研究者が弘前大に集まり、調査やデータの分析方法などを調整し、タイプの違う地域の傾向を相互検証しやすいようにした。

和歌山県立医科大の上松右二教授は「全国の研究者が直接顔を合わせることで良い刺激を受ける。ボランティアが熱心な弘大の岩木健診は、大いに参考になる」と語った。

中路特任教授は「２千項目以上にわたる岩木健診の健康ビッグデータがあるからこそ、全国のあらゆる健康データと組み合わせができる。ウィンウィン（相互利益）の関係になれる」。弘大ＣＯＩ副拠点長の村下公一教授は「弘前大の岩木ビッグデータを軸に、世界的な健康研究の一大研究拠点形成につなげていきたい」と意欲を語った。